

令和4年度

<研究主題>

家庭科から家庭へ

～学習したことを家庭生活に生かし、継続的に実践できるようにするための

家庭との連携は、どのようにすればよいだろうか～



佐倉市立和田小学校 佐倉市立弥富小学校 佐倉市立井野小学校

佐倉市立佐倉東小学校 佐倉市立西志津小学校

1 研究主題

家庭科から家庭へ

～学習したことを家庭生活に生かし、継続的に実践できるようにするための家庭との連携は、どのようにすればよいただろうか～

2 主題設定の理由

(1) 学習指導要領とのかかわり

前学習指導要領の課題として、家庭生活や社会環境の変化による家庭や地域の教育機能の低下等が指摘され、家族の一員として協力することへの関心が低いこと、家族や地域の人々と関わり、家庭での実践や社会に参画することが十分ではないことなどが挙げられている。そのため、現学習指導要領では、内容の取扱いと指導上の配慮事項(5)として、「家庭や地域との連携を図り、児童が身に付けた知識及び技能などを日常生活に活用できるように配慮すること」が示されている。これを受けて、児童が家庭生活への興味関心を高め、家庭科学習で身に付けた知識や技能などを家庭生活に生かし、継続的に実践できるようにするための家庭との連携はどのように図ればよいかについて、研究を進めることとした。

(2) 児童の実態から

同じ佐倉市内にある和田小学校、弥富小学校、井野小学校、佐倉東小学校、西志津小学校の5校は、規模も歴史も周囲の環境も違うが、各校とも穏やかな雰囲気、授業にも落ち着いて取り組んでいる。家庭科に対して、児童の興味関心は比較的高く楽しんで学習している子が多い。しかし、家庭での様子を見ると、手伝いはするが家族の一員として協力することへの関心が薄かったり、家族と関わり、家庭生活を大切にすることに消極的だったりする子が見受けられる。家庭の受け止め方も様々で、家庭科で学習したことを積極的に実践する家庭もあれば、家庭での実践について協力を依頼してもなかなか実践できない家庭もある。そこで、家庭科学習のねらいや内容についての情報提供など、家庭に向けた情報発信を行えば、家族がその意義や内容を理解できるようになり、家庭での実践への理解が深まることになるだろうと考えた。児童が家庭の協力を得られやすい手立てを工夫し、日常生活でも実践する喜びを味わい、自信を育てることを目指し、本主題を設定した。5校それぞれが、研究主題に沿って、単元の特色、実態を考慮した独自の試みを行い、それぞれの成果や課題を提案していく。

3 研究仮説

(1) 仮説1

学習したことを日常生活で活用したり定着を図ったりするために、教材・教具を工夫すれば、家庭生活に生かすことができるだろう。

(2) 仮説 2

家庭へ情報を提供するための手立てを工夫すれば、家庭で実践する喜びを味わい、継続的な実践ができるだろう。

4 研究内容

(1) 仮説 1 について

家庭科が、学校での学びにとどめず、学んだことを家庭で再現できるようにするには、どのような仕掛けをしていけばよいか、それぞれの学校で考えた、教材・教具を提案する。教材・教具とは、ワークシートも含めた、児童に提示する資料全般ととらえることとする。また、学校で学んだことを家庭で活用、定着させるものというとらえ方(学校→家庭)だけでなく、児童の日常生活に直結した具体的に実践的な学習を取り上げている家庭科学習の特性を生かすため、児童自身が家庭生活を意識して家庭科学習に取り組ませるためのものというとらえ方(家庭→学校)も含むものとする。

(2) 仮説 2 について

家庭での実践につなげようとするとき、学習のめあてや意義が家庭に届かなかったり誤解されたりする時がある。児童自身がよく理解し家族にうまく説明することは大切であるが、それができない児童もいる。逆に、家族が学習の意図をよく理解し、それがきっかけで家庭での実践につながったという時もある。ゆえに、児童の意欲を持続させ、継続的な実践に結び付けるための手立てとして、家庭への情報提供は大切であると考え。家庭での実践への理解が深まれば、児童が家庭での協力を得て、日常生活や長期休業中の家庭生活で充実した実践ができるようになる。家庭の教育機能低下が問題視されている今、家族が子どもの家庭科学習の内容を知り、見守ったり一緒に実践したり考えたりしていくことが、家族や家庭生活を大切にすることを育て、家族のかかわりを深めることにもつなげられるものとする。

5 指導の実際

5校(和田小、弥富小、井野小、佐倉東小、西志津小)が、令和3年度に行った実践を紹介する。コロナ対策のため、たくさんの制限がある中で行われた実践であることを申し添えたい。

6 成果と課題

仮説1 学習したことを日常生活で活用したり定着を図ったりするために、教材・教具を工夫すれば、家庭生活に生かすことができるだろう。

【成果】

- ワークシート作りでは、調理実習に取り組むため、身支度から後片付けまでの一連の流れがわかるものを作った。記入例を示し記入しやすくすると、担任も確認がしやすくなり、保護者も児童の調理方法や手順が見やすくなった。また、ワークシート内に家族からのアドバイスや感想を書き込む欄を作ることで、児童の取り組みの手助けやその後の励みになり、家庭での実践につながる子が増えた。教科書会社の指導者支援用コンテンツを利用することも、ワークシートを作る上でのヒントとなることがわかった。
- タブレットを持ち帰り、調理動画を参考にしたり、実習の様子を写真に撮ってミライシードのオクリンクで送ったりした。学習したことを生かしてメニューを考え、冬休みに家庭で進んで実践する児童が見られた。
- 不要な歯ブラシなどの身近にあるもので用具を簡単に作り、活用することに気付くことで、家での実践につなげることができた。

【課題】

- △実習計画を立てる前に、家庭で調理についてのインタビューや作り方の様子を見学させれば、計画を立てる時間を短縮でき、『我が家独特』という家庭とのつながりがさらに出せた。
- △コロナ禍で学校での実践回数が乏しいため、実践に即した指導が困難であった。実際に練習することは大切であり、常に、洗剤の使い方や水の使い方、ごみの扱い方などの環境問題と関連させる必要がある。
- △家庭でどのようなものを使用しているか、どのように行っているか等、大きな宿題としてではなく、毎回の授業で小さなテーマを1つ作って調べるようにすれば、もっと家庭と密着した内容にできた。

仮説2 家庭へ情報提供するための手立てを工夫すれば、家庭で実践する喜びを味わい、継続的な実践ができるだろう。

【成果】

- 保護者向けに家庭科や学年・学級だよりを発行したり、ワークシートを持ち帰ったりしたことで、学習内容・単元のめあて・学習の目的や意図など、家庭科の学習について知ってもらう機会を作った。また、家庭科の作品を廊下や教室にも掲示をすることで、保護者と話す機会ができた。家族との触れ合いの機会ととらえたり、夏休みなど長期の休みに取り入れてもらったりして、家庭での実践につなげることができた。

○家庭で実践することを初め面倒な宿題ととらえていた児童がいたが、家族との触れ合いや称賛によって、進んで取り組もうという気持ちの高まりが見られた。

○児童が実習している様子をタブレットで保護者に撮影してもらい、保護者と一緒に行う場面設定ができた。それによって、家族との触れ合いや、家族が興味をもつきっかけをつくることができた。

【課題】

△家庭による受け取りの差があった。実演の動画を用意するなどの児童支援の手立てを用意し、家庭への情報伝達の方法を考えることが大切である。

△学校での実践をもとに、家での取り組みを長期休暇に行うことは、忙しい児童の実情を見るとは有効であるが、継続的な活動にするためには、さらに家庭にむけて、周知を図る必要がある。